

府立四條畷高等学校

(2)	教え方にさまざまな工夫をしている先生は多い。	96 ↑	－	－
	興味を感じる授業が多い。	87 ↑	－	－
	ペアワークやグループワークなどを授業に取り入れている。	－	－	91 ↑
	授業におけるICT機器の活用。	－	－	98－
(3)	担任以外にも悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる。	91 ↑	－	93－
	学校生活についての先生の指導は納得できる。(教員:理解を得ている)	94 ↑	97 ↑	93 ↓
	将来の進路や生き方について考える機会がある。	97－	96 ↑	93 ↑
	生命の大切さや社会のルールについて考える機会がある。	93 ↑	94 ↑	－
(4)	いじめについて困っていることがあれば真剣に対応してくれる。(教員:体制が整っている)	98 ↑	96 ↑	96 ↓
	畷高祭は、楽しく行えるように工夫されている。	97－	96 ↑	97 ↓
	部活動に積極的に取り組んでいる生徒が多い。	99 ↑	98 ↑	93－
(5)	本校の探究活動の取組みに満足。	83 ↑	94－	100 ↑
	本校の国際交流(台湾修学旅行・オーストラリア研修等)の取組みに満足。	95 ↑	96 ↑	100 ↑
(6)	成績などの内容についてプライバシーが守られている。	96 ↓	97 ↑	83 ↓
	人権を尊重した指導への取組み。(教員:十分話し合われている)	－	96 ↑	93 ↑
(1) 学校生活の満足度は生徒・保護者とも高く、生徒・保護者いずれも肯定率が上昇した。「勉学はもちろん行事・部活動も全力で取り組み、楽しむ」という教育方針が評価されているとれる。				
(2) 教え方の工夫、興味を感じる授業の肯定率はともに上昇。教員に関しては、ペアワークやグループワークの肯定率は上昇、ICTの活用の肯定率は高い数値を維持した。今後も希望する進路の実現につながるよう、各教科での研究授業など研鑽の機会を設け、授業力向上に力を入れていく。				
(3) 肯定率は、生徒と保護者ではすべて上昇か維持となった。教職員では指導の納得感といじめの体制について微減したが、いずれも高い数値で維持できている。3年間の進路指導計画『なわて』に基づく進路指導、丁寧な教育相談などの成果が指標にも表れていると考え、今後も指導体制の充実に努める。				
(4) 畷高祭の肯定率は教員で微減したが、それ以外の肯定率は上昇しており、全体としての肯定率は高い。本校の文武両道の伝統が継承されている表れであり、今後も部活動や学校行事を通じて、生徒の「自主・自律・自由」の精神を育んでいく。				
(5) 探究活動と国際交流の取り組みに関する肯定率は上昇。特に教員の肯定率の高さは指導の充実の現れである。大学の総合型選抜でも結果が出ており、今後も引き続き探究活動や国際交流の充実を図る。				
(6) プライバシー保護に関する肯定率は生徒と教職員で減少した。これは年度中に個人端末の管理についての通知など状況が変化したため、一層の管理が必要となったことに伴う結果と考えられる。人権教育の取り組みに関する肯定率はいずれも高く、今後も充実に努める。				
は困難であるが、組織的に効率化を図り、学校全体で改善に取り組んでいる。 ・校内の業務の効率化だけではなく外注することも視野に入れてみてはどうか。例えば生成 AI を取り入れることで業務の効率化を図ることも検討してみてはどうか。 →生成 AI を授業内で活用している教員もあり、今後も活用方法を模索していく ・公立高等学校入学者選抜における学校特色枠について国語、数学、英語の3教科だけで、理科と社会は入らないのはなぜか。 →理科および社会は共通問題であり、国語、数学、英語は選択問題のため特色枠で活用することとした。(了承) ・PTAの加入率が高いのはよいことである、維持してもらいたい。				
第2回 令和7年11月25日(水) ・今後SSH第Ⅳ期獲得のために学外発信をどうしていくのか。負担ではないか。 →北河内生徒探究活動成果発表会を2月に実施、参加校を増やす。SSH指定以外の学校のアドバイザーとして事例を紹介している。教材の共有や公開授業の実施については、新たな業務ではなく、既存の取組みを活用して普及に努めており大きな負担はない。 ・教員の働き方改革について。やめることリストの実効性や最近の傾向はどうか。 →改革の途上にあり、業務の精選に努めている。生成 AI の活用により、報告書や課題作成の時間短縮につながっている。 ・生成 AI に関して、大学では論文等で不適切な使用問題があるが、高校ではどうか。 →探究でも教科でも使わせているケースがある。提出の際はどうか添削されたかを明示させる、引用文献にいれる、またファクトチェックして使うよう指導。情報検索には便利。				
第3回 令和8年2月19日(木) ・生徒の遅刻数の増加原因と今後の指導方針について確認する。 →コロナ禍以降の変化でもあるが、体調不良でも欠席せず、通院後に登校する生徒などもあり増加している。自己の不注意等が理由の遅刻に焦点化し、生活改善の指導をしていく。 ・教員の働き方改革については、長らくこの委員会で課題として扱ってきた。教員のやりがいや大事にしつつ、業務の効率化など推進してほしい。AIの活用も考慮されたい。 →次年度も引き続いて改革に取り組む。AIの活用については正しく活用するための研修を次年度早期に生徒と教員対象に実施の予定。 ・部活動と学業の両立について、一層生徒へ注意喚起や指導をしてほしい。				
※学校経営計画について令和7年度評価、令和8年度計画について承認				

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R6年度値]	自己評価
1 「確かな学力」の育成と進路実現への支援	(1)「確かな学力」の定着と学びの深化 ア より高い授業力を求めた授業研究	(1) ア・授業力向上委員会が中心となって、教員の授業力向上を図る。 ・相互授業見学のコメントシート「学ログ」を有効活用して、授業見学・授業公開・研究授業を積極的に行い、生徒の興味・関心を高める授業を実践する。 ・教科横断的な授業見学を活性化する。	(1) ア・教員の授業観察件数1人平均5回以上 [7.7回] ・授業アンケート全校平均3.4以上の維持 [3.52] ・学校教育自己診断(生徒)「興味を感じる授業」の肯定率85%以上をめざす [84%]	(1) ア・教員の授業観察件数1人平均5.1回となり、目標を達成した。今後は回数ではなく、研修などを通じて授業力の向上を図る。(○) ・授業アンケート全校平均3.53となり目標を維持。(○) ・学校教育自己診断(生徒)「興味を感じる授業」の肯定率は87%となり上昇した。(◎) イ・ICT機器の活用率は98%と維持した。(○) 今後も授業力の向上に向けて取組みを推進する。
	イ 1人1台端末などICT機器を効果的に活用した授業づくり	イ・1人1台端末など、ICT機器を効果的に活用した授業の研究・実践を行う。	イ・ICT機器の活用率95%以上の維持 [98%]	
	(2)観点別学習状況の評価の推進による指導と評価の一体化 ア 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進 イ 探究チャレンジ等による確かな学力の育成	(2) ア・「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進する。 イ・3年間を5期に分け、それぞれの目標を定め、全生徒を対象にして計画的に探究チャレンジを行う。 ウ・本校の探究活動の成果を地域の高校や中学校へ情報発信する機会を増やす。	(2) ア・アクティブラーニング(AL)の実施率85%以上 [86%] イ・学校教育自己診断(生徒)「探究チャレンジ」の肯定率75%以上 [79%] ウ・北河内探究活動交流会や探究チャレンジの公開授業への参加者の増加 [24校、41名]	(2) ア・アクティブラーニング(AL)の実施率91%となり上昇した。(◎) イ・学校教育自己診断(生徒)「探究チャレンジ」の肯定率83%となり上昇した。(◎) ウ・北河内探究活動交流会や探究チャレンジの公開授業への参加者の増加 [52校、81名] (◎) 今後も主体的な学習活動に関する取組みを進める。
	ウ SSH第Ⅲ期の目標である探究活動の地域への発信をめざす	ウ・本校の探究活動の成果を地域の高校や中学校へ情報発信する機会を増やす。	ウ・北河内探究活動交流会や探究チャレンジの公開授業への参加者の増加 [24校、41名]	
	(3)進路実現の指導と支援 ア 進路指導計画『なわて』の有効活用	(3) ア・希望する進路実現に向けて、3年間の基礎学力調査『なわて』を有効に活用し、進路指導の見える化を進める。	(3) アイ・学校教育自己診断(生徒)「将来の進路や生き方について考える機会」の肯定率90%以上 [98%]	(3) アイ・学校教育自己診断(生徒)「将来の進路や生き方について考える機会」の肯定率97%となり維持した。(○)
	イ 習熟度別授業の充実と生徒の意欲向上	イ・数学・英語で習熟度別授業を充実させて、生徒の意欲向上を促し、希望する進路の実現につなげる。	イ・数学・英語で習熟度別授業を充実させて、生徒の意欲向上を促し、希望する進路の実現につなげる。	
	ウ 飯盛セミナーなどを通じたキャリア発達の促進	ウ・飯盛セミナー、大学研究室訪問を実施する。	ウ・大学研究室訪問の参加者数500人以上の維持 [734人]	ウ・大学研究室訪問の参加者数は760人と維持した。(○)
	エ 講習・補習等による自学自習の効果の向上	エ・適切な課題の設定や自習室の開室などで自学自習の充実を図る。 ・大学入試の変化や生徒の学習状況を分析し、生徒の状況に応じた講習・補習等を充実させる。 ・進学実績が優れているなど、特色のある高校の視察を積極的に行う。	エ・学校教育自己診断(生徒)「先生は質問によく答えてくれる」の肯定率95%以上 [99%]	エ・学校教育自己診断(生徒)「先生は質問によく答えてくれる」の肯定率は100%と維持した。(○)・ 今後も進路実現に向けた指導と支援を継続して行う。

府立四條畷高等学校

2 社会に貢献できる「豊かでたくましい人間性」の育成	(1) グローバルリーダーとしての資質の育成 ア 生徒会活動、部活動等によるたくましい人間力の育成	(1) ア・文化祭等の行事や部活動をさらに充実させる。	(1) ア・学校教育自己診断(生徒)「畷高祭の工夫」に関する肯定率 95%以上の維持 [97%] ・部活動の加入率 95 % 以上 (99.1%) イ・年間遅刻者数の前年度 10%の削減 [1627 件] ・学校教育自己診断(生徒)「挨拶をよくする」の肯定率 80%以上を維持する [85%] ・学校教育自己診断(教職員)「人権を尊重した指導」への肯定率 70%以上 [74%]	(1) ア・学校教育自己診断(生徒)「畷高祭の工夫」に関する肯定率 97%と維持した。(○) ・部活動の加入率は 98%と維持した。(○) イ・年間遅刻者数は 2000 名超で昨年を上回り、達成できなかった。体調不良でも通院後登校するなど学びに向かう姿勢は様々で、一概に合計数のみをもった判断は難しくなっている。今後は目標を見直し基本的生活習慣の意識向上に取り組む。(△) ・学校教育自己診断(生徒)「挨拶をよくする」の肯定率 85%と維持した。(○) ・学校教育自己診断(教職員)「人権を尊重した指導」への肯定率は 79%と向上した。(◎) 今後もグローバルリーダーとしての資質の育成に向け各種の取組みを行う。
	(2) コミュニケーション能力等の育成 ア 校内発表会への取組みを通じて、能力の育成を図る	(2) ア・英語スピーチ大会(如月杯)、探究チャレンジ発表会(2回)などを系統的に実施し、コミュニケーション能力の向上を図る。	(2) ア・学校教育自己診断(生徒)「発表活動のチャンスが多い」の肯定率 90%以上 [96%] ・校外のコンテスト等での入賞 10 件以上 [13 件]	(2) ア・学校教育自己診断(生徒)「発表活動のチャンスが多い」の肯定率 96%と維持した。(○) イ・校外のコンテスト等での入賞 [17 件] (◎) 今後もコミュニケーション能力等の育成を図る。
	(3) 国際交流活動の充実 ア 海外との交流を活用したグローバルリーダーの育成	(3) ア・SSH タイ研修や台湾修学旅行、オーストラリア研修、ベトナム医療ボランティアツアーなどの国際交流を実施する。 ・台湾、オーストラリアなどの高校生とオンラインでの交流を継続する。	(3) アイ・学校教育自己診断(生徒)「国際交流の取り組み」の肯定率 90%以上 [94%] イ・英語運用能力育成にかかる外部試験「TOEFL Junior」を新たに実施する	(3) アイ・学校教育自己診断(生徒)「国際交流の取り組み」の肯定率 95%と維持した。(○) イ・「TOEFL Junior」を 4 月 25 日実施、今後も継続して行う。(○) 今後も国際交流活動を継続的に実施する。
	イ 4 技能統合型の授業や講習等による実用英語力の向上	イ・4 技能統合型の英語授業や講習などを通じて、使える英語力を向上させる。		
3 学校力・教員力の向上	(1) 機動力のある組織体制 ア ミドルアップダウン型の運営体制づくり	(1) ア・経営企画会議、将来構想検討委員会、授業力向上委員会などを通じて課題認識の共有を図り、教職員研修を通じて課題解決に向けてのコンセンサスを作る。	(1) ア・学校教育自己診断(教職員)「各種会議が有効に機能」の肯定率 70%以上 [72%] ・学校教育自己診断(教職員)「教育活動全般の評価と検証」の肯定率 70%以上 [71%] イ・学校教育自己診断(教職員)「探究チャレンジの取組み」の肯定率 90%以上 [96%]	(1) ア・学校教育自己診断(教職員)「各種会議が有効に機能」の肯定率 74%と上昇。(○) ・学校教育自己診断(教職員)「教育活動全般の評価と検証」の肯定率 79%と大幅に上昇。(◎) 今後も効率の良い会議運営、教育活動の意義を検討する機会を設けて検証を続ける。 イ・学校教育自己診断(教職員)「探究チャレンジの取組み」の肯定率 100% (◎) 今後も地域や外部への発信を継続的に行う。
	イ グローバルリーダー育成のための組織と業務の見直し及び検証 ウ 部活動方針の遵守による教員の時間外在校時間の縮減 エ. 働き方改革の実行による仕事の負担リスク減少	イ・GL 部を中心に全校体制で探究チャレンジの指導に取り組み、地域に発信する。 ウ・部活動方針の遵守及び全校一斉定時退庁日の遵守を推進するなど、校務運営の効率化をさらに進める。 エ・職務の偏重をなくし、教職員全員で様々な教育活動にあたる。 ・年次有給休暇の取得を促す。 ・教職員間の情報共有に努め、風通しの良い職場環境を作る。	ウ・時間外勤務月 80 時間以上の職員合計数の 10 % 以上の減少 [104 人] エ・ストレスチェックにおける職場総合健康リスク 90 以下の維持 [73]	ウ・時間外勤務月 80 時間以上の職員合計数は 1 月末段階で 75 人と昨年同時期比より減少しており、達成の見込み。(○) エ・ストレスチェックにおける職場総合健康リスクは 72 となり維持できた。(○) 今後も業務の精選行うとともに、風通しの良いストレスの少ない職場づくりをめざす。
	(2) 研修等による教員力の向上 ア 校内研修を計画的実施	(2) ア・スキルアップ研修等、校内研修の計画的実施	(2) ア・年間教職員研修の回数 10 回以上を維持する [12 回] イ・初任者ミーティング等、研修の効果測定を行い、肯定率 95%以上を維持する。[100%]	(2) ア・年間教職員研修の回数は 16 回となり目標を達成した。(◎) アイ・初任者ミーティング等、肯定率 100%で維持。(○) 今後も継続的に効果的な研修を実施する。
	イ 法定研修を活用した OJT による教員力の向上	イ・メンター制度により OJT で初任者、2 年め、10 年め教員の相互育成を図る。	(3) ア・学校説明会への参加者数 2,500 名以上の維持 [3075 名] ・母校訪問の増加 [45 校、110 名]	(3) ア・学校説明会の参加者数 2,872 名で維持した。(○) ・母校訪問の畷高アンバサダー事業は本校と中学校の夏休み期間が異なったため、希望者する生徒は多かったが、実施は減少。今後は目標設定を見直し継続する。[30 校、84 名] (△) 今後も広報活動の充実に努める。
	(3) 広報活動の充実による教育力の向上 ア 広報活動による本校の特色とアドミッションポリシーの発信	(3) ア・校内外での学校説明会などで積極的に本校の特色を発信する。		
	(4) 安全で安心な学校生活への環境整備 ア 個人情報の適正な管理と事故対応への体制整備 イ 障がい等による支援や指導を要する生徒への適切な対応	(4) ア・個人情報の適正な管理と事故対応について周知徹底を図る。 イ・障がい等支援が必要な生徒には支援検討会議が中心となって合理的配慮に基づく支援を行う。 ・不登校など配慮の必要な生徒等に対する初期対応を手厚くするとともに、SC との連携を図り、支援検討会議を通じて必要な支援を行う。 ウ・防犯・防災計画、大規模災害時初期対応マニュアル等の内容を周知徹底する。 ・学校三師と連携し、感染症対策などの注意喚起を積極的に行う。	(4) ア・学校教育自己診断(教員)「個人情報に関する管理システムの確立」に対する肯定率 85%以上の維持 [93%] イ・学校教育自己診断(教員)「支援や配慮」に関する肯定率 90%以上の維持 [95%] ウ・全校避難訓練や避難指導の実施 2 回以上 [2 回] ・教職員救急法講習会の実施 1 回以上 [1 回]	(4) ア・学校教育自己診断(教員)「個人情報に関する管理システムの確立」に対する肯定率は 83%となり目標を下まわった。個人情報の取り扱いが厳格化したことが影響していると考えられる。今後は目標を再設定し、向上に努める。(△) イ・学校教育自己診断(教員)「支援や配慮」に関する肯定率は 89%となり目標を少し下回った。今後は目標を再設定し、支援や配慮の充実に努める。(△) ウ・全校避難訓練(6/4)、避難指導(9/17)を実施。(○) ・教職員救急法講習会(6/24)実施。(○) 今後も安全で安心な学校生活への環境整備に努める。
	ウ 災害や事故等発生時の体制整備、感染症対策の徹底			
	(5) 地元に信頼される学校づくり ア 四條畷市等との連携	(5) ア・小中学校への出前授業やオープンラボ等、四條畷市等と交流した取組みを行う。 イ・地域連携企画 in 畷高(北河内探究活動交流会や小中学生対象のイベント等)によって本校の教育活動を地域の高校や中学校に広げていく。	(5) ア・小中学校を対象とした取組み及び四條畷市と連携した取組み 7 種類以上 [10 種類、23 件] イ・地域住民等に向けた取組み 7 種類以上 [10 種類、22 件] ・北河内探究活動交流会など、「地域連携企画 in 畷高」の参加者数 100 名以上を維持する [130 名]	(5) ア、イの取組みはともに 11 種類、22 件で維持した。(○) イ・北河内探究活動交流会等の参加数は 156 名。(◎) 対象地域の広域化、連携の多様化が見られることから、今後は「重点目標」そのものを見直し、信頼される学校づくりの深化をめざす。
	イ 部活動や学校行事、探究チャレンジの成果発表などを通じた地域貢献			